

岐阜県岐阜市方言



岐阜県方言区画図

【岐阜県の方言区画】岐阜県は、古来、美濃国と飛騨国の二カ国があり、それぞれに歴史を形成してきた。江戸時代には、美濃が尾張藩を始め所領に分割されて治められたのに対し、飛騨は、全域が天領であった。このことにより、岐阜県の方言は大きく美濃方言と飛騨方言に分けられる。

一方、岐阜県方言は、美濃と飛騨の一体性が見られるものと評されることが多い。飛騨は、越中(富山県)や加賀(石川県)など北陸地方とは、峻険な山で閉ざされ、また、明治維新後一時期松本に県庁を置く筑摩県の一部であったとは言え、やはり冬期には隔絶される信州とはことばの面で異なりが大きい。反面、美濃との間は冬期でも通行可能な経路が多く、ことばの面での一体感は、交通により確保されてきた部分も多分にあるといつてよい。

美濃方言の特徴としては、否定形式に「～ん」の他、近畿地方から伝来した「～セン」やその変化形である「～ヘン」が、強意の意味なく用いられる地域が広くある。これに対し、飛騨地方では、否定形式は「～ん」ひとつである。また、概して、アスペクト形式の「～ヨル」(持続)と「～トル」(結果・持続)の使い分けは、飛騨地方に見られ、美濃地方では、

郡上方言と東濃地方、それから中濃の一部を除いてあまり見られない。推量の形式については、美濃地方で指定の助動詞「ヤ」と組み合わせられた「ヤロー」「ヤラー」が用いられるのに対し、飛騨地方では、「降ルロー」のように、動詞に指定の助動詞を介さず「ロー」が付く形をとるなど差が見られる。また、東濃地方では、「降ルラ(ー)」のような推量形があり、長野や静岡へとつながる特徴を呈する。

岐阜・中濃方言では、愛知県尾張地方の影響を強く受けている点も、方言的特徴を形成する上で大きな要因となっており、連母音「アイ」が「アエー[æ:]」あるいは「エアー[ɛ:]」へと融合する現象は、特に美濃地方南部に多い。一方、連母音「オイ」「ウイ」が融合した長母音はかなり廃れあまり聞かれない。また、終助詞「ナモ」類も、尾張藩の影響が及んだ美濃地方各地に点在する形で残存している。

【岐阜市方言について】岐阜市は、方言的にも、近隣地域と連続する特徴を示す都市である。

市北部では、美濃方言のうち、中濃方言の特徴である、持続・結果の形式の「～チョル」や「～ておく」の意味の「～チョク」が聞かれる。また、敬語形式の「ンサル」は、市北部ではよく聞かれるが、一方、市南部では、愛知県から流入したと考えられる「ヤース」系敬語が多くなっているなど、地域内での差も老年層においてはやや大きい。

「食べる」などいわゆる一段動詞の否定形式については、昭和時代まで、市北部で「食べーへん」と長音で発音したのに対し、市南部では「食べへん」と短形を用いていたが、平成に入ってから、大垣市などで一般的であった短形が岐阜市でも一般化し、「見ーへん」「寝ーへん」など、語幹が一音節であるものを除いて、若年層では短形のみが用いられるようになるなどの変化が進行中である。

【表記について】連母音「アイ」の融合した形は、名古屋方言の[æ:]よりも「エ」に近い[ɛ:]となる。これを、「エァ」と表記する。ガ行鼻濁音もふつうにおこなわれるが、ここでは、通常のガ行濁音として示す。

【調査概要】基本的に筆者(昭和40年生まれ)の内省によるものであるが、実際に筆者自身が使用する形式に限定はせず、筆者が生まれてから岐阜市内にて耳にしたことのある形式を、やや年齢層広く集めて挙げた。

岐阜県岐阜市方言の活用表

《動詞》

活用形		類別	a類 書く	b類 見る	来る	する
終 止 類	断定非過去		カク	ミル	クル	シル スル
	断定過去		カイタ	ミタ	キタ	シタ
	命令		カケ カキヤー	ミヨ ミヤー	コイ コヤー	シヨ セヨ シヤー
	禁止		カクナ カキヤースナ	ミンナ ミヤースナ	クンナ コヤースナ	スンナ シヤースナ
	意志		カコ	ミヨ	コヨ	シヨ
	推量		カクヤロ	ミルヤロ	クルヤロ	シルヤロ スルヤロ
接 続 類	連体非過去		カク	ミル	クル	シル スル
	連体過去		カイタ	ミタ	キタ	シタ
	中止		カイテ	ミテ	キテ	シテ
	仮定		カキヤ カケバ カイタラ	ミヤ ミリヤ ミレバ ミタラ	コヤ コリヤ コレバ キタラ	シヤ シリヤ スリヤ スレバ シタラ
派 生 類	否定		カカン カカヘン	ミン ミーヘン	コン コーヘン	シン セン シーヘン
	丁寧		カキマス	ミマス	キマス	シマス
	使役		カカス カカセル	ミサス ミサセル	コサス コサセル	サス サセル
	受身		カカレル	ミラレル	コラレル	サレル
	可能肯定		カケル カケレル	ミレル	コレル	《デキル》 シレル
	可能否定		カケン カケレン ヨー カカン ヨー カカヘン	ミレン ミレーヘン ヨー ミン ヨー ミーヘン	コレン コレーヘン ヨー コン ヨー コーヘン	《デキン》 シレン ヨー シン ヨー シーヘン
	尊敬		カキヤース カキンサル	ミヤース ミンサル	コヤース オンサル	シヤース シンサル
	継続		カイトル	ミトル	キトル	シトル
	希望		カキテア	ミテア	キテア	シテア
	のだ		カクンヤ	ミルンヤ	クルンヤ	スルンヤ

a 類動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak・u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik・uはkをQ(促音)にし「イッ-タ」。
g	嗅ぐ kag・u	カイ-ダ	gをiにする。-タが-ダになる。
s	出す das・u	ダイ-タ ダシ-タ	sをiにする形と基幹イ段形の併用。「出す」などイ段形しかとらない動詞もある。
t/c	立つ tac・u	タッ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin・u	シン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob・u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom・u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir・u	キッ-タ	tをQ(促音)にする。
w/	買う ka(w)・u	カッ-タ	wはQ(促音)にする。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

	赤い	静か(だ)	学生[ガクセー](だ)
終止類	断定非過去	アケア	シズカヤ
	断定過去	アカカッタ	シズカヤッタ
	推量	アケアヤロ	シズカヤロ
接続類	連体非過去	アケア	シズカナ
	連体過去	アカカッタ	シズカヤッタ
	中止	アカテ	シズカデ
	仮定	アカケリヤ アカケヤ アカカッタラ	シズカナラ シズカヤッタラ
派生類	否定	アカネア アケアコトネア	シズカヤネア シズカヤアラヘン
	なる	アカナル	シズカンナル
	丁寧	アカイデス	シズカデス
	のだ	アケアンヤ	シズカナンヤ

1. 動詞の活用の特徴

(1)活用型と語類の対応

a 類動詞(五段動詞)は 型、b 類動詞(一段動詞)は 型、「来る」は 型k、「する」は 型sの活用形をもつ。

b 類動詞「見る」の活用型は、基本的に共通語と変わらないが、「起きる」など少数の動詞は、命令形で「オキレ」と、 型rの形式をとるものもある。ただ、「見る」が「ミレ」となることはなく、 型rとなるものは非常に限定的である。ただし、県内でも、東濃地方では、完全に、「ミラン」「ミリマス」「ミレ」のように 型rとなることもある。

「来る」は、仮定形が「コレバ」となる。この形は方言であるとの意識がなく、全国共通語との意識

のもとでも使われる。

「する」は、より 型sに収れんしており、断定過去形(シタ)・テ形(シテ)のほか、否定形(シン)、断定非過去(シル)、仮定形(シヤ)、命令形(シヤ)となっている。より古くは、岐阜市でも断定過去形「セル」や否定形「セン」が多く聞かれたが、現在では、基幹として「シ」が優勢である。

(2)各活用形の特徴

〈断定非過去形・連体非過去形〉

断定非過去形、連体非過去形は同形で、「書く」「見る」「来る」「する」は、「カク」「ミル」「クル」「シル」となる。

〈断定過去形・連体過去形〉

断定過去形、連体過去形は同形で、a 類動詞は基幹音便形に、b 類動詞は 型基幹 (= 語幹) に、「来る」「する」はそれぞれ 型 k・s のイ段形「キ」「シ」に「タ」を後接した形となる。

〈命令形〉

a 類動詞は、「カケ」のようなエ段形のほか、「カキヤ」のような拗音ア段長音形(語幹-yaR)も命令という機能をもって用いられる。やや年配の世代では、「なさい」に相当する「カキンセー」類がある。

・はよしやー。学校、遅れてまうに。(はやくしなさい。学校に遅れてしまうよ。)

b 類動詞、「する」は、いずれも基幹に「ヨ」が付くことによって、「ミヨ」「シヨ」が基本的な命令形として用いられ、「来る」では「コイ」となる。また、基幹に「ヤー」が付いた「ミヤー」「コヤー」「シヤー」も、命令という機能を表示する形式となっている。

・これ、食べやー。ひとつぎしやで、もーやっこしやーよ。(これ、食べなさい。ひとつだけだから、分けて食べなさい。)

〈禁止形〉

共通語と同じく、終止類断定非過去の形に「ナ」を付けて得られる形が、基本的には用いられるが、そのほかに、前項の「カキヤ」「ミヤー」「コヤー」「シヤー」の禁止形である「カキヤスナ」「ミヤースナ」「コヤースナ」「シヤースナ」も頻繁に用いられる。

・タワケタコト シヤースナ。(ばかなことをするな。)

〈意志形〉

a 類動詞の意志形は 型オ段「カコ」となる一方、b 類動詞・「来る」「する」については、基幹に「ヨ」が付くことで、「ミヨ」「コヨ」「シヨ」となる。末尾が長音になることはまれで、代わりに意志を表す際には終助詞「カ」を伴い、「カコカ」「ミヨカ」「コヨカ」「シヨカ」となることが多い。

意志形は、単独でも勧誘でも用いられるが、より強く誘う場合には、「カコメア」や「カコツケ」のような形式を用いることもある。

・いっしょに、旅行行こめあ。(いっしょに、旅行に行こう。)
 ・どぶどぶ言つとらんと、はよやってまおつけ。

(文句を言っていないで、早くやっしまししょう。)

〈推量形〉

推量形は、それぞれ「カクヤロ」「ミルヤロ」「クルヤロ」「スルヤロ」のように、断定形に「ヤロ」を付けて表す。岐阜県内では、西濃地方で「ヤロ」が、東濃地方で「ヤラ」が推量の意味で用いられるが、岐阜・中濃地方では両形が混在する。そのため、単なる推量の場合には「ヤロ」が、確認要求の場合には「ヤラ」が用いられるというように、機能分化している世代もある。

〈中止形〉

中止形は、a 類の基幹音便形など過去形と同じ形に「テ」を後接する。a 類動詞の音便形は、力行、ガ行のほか、サ行でイ音便形の「サイテ」(指して)、「ダイテ」(出して)のようになる。「ハロテ」(払って)のようなワ行ウ音便はおこなわれない。

・傘さいて、ゴミだいて来た。(傘をさして、ゴミを出してきた。)

〈仮定形〉

a 類動詞は、「カキヤ」のような拗音ア段形がもっとも多く使われる。「カケバ」のような仮定形も用いられるほか、「カイタラ」も多い。「カケバ」は、単独で勧奨の意味をもたないが、「カイタラ」は勧奨の意味にも用いられる。

b 類動詞・「来る」「する」は、「ミヤ」「コヤ」「シヤ」のような、基幹に「ヤ」を付けた形他、型 r のア段拗音(...r-ya)「ミリヤ」「コリヤ」「シリヤ」も用いられる。「シリヤ」は「スリヤ」ともなる。また、「来る」の「バ」の形は「コリヤ」となるが、この形式は共通語という意識をもって用いられる。「タラ」については、a 類動詞と同じである。

・ここまでこや、まー安心やわ。(ここまで来れば、もう安心だ。)
 ・わっちは、何すりやえーかなあ。(私は、何をすればいいですか。)

仮定形は、「エー」を後接させて当為判断の形式ともなる。この場合、多くは「カキヤエー」「ミヤエー」「コヤエー」「シヤエー」(あるいは「スリヤエー」と、「ヤ」の形をとる。

〈否定形〉

否定形は、a・b 類動詞・「来る」では、「カカン」

「ミン」「コン」となる。「する」では「シン」が一般的であるが、やや高齢の世代では「セン」も多く見られる。

短い「ン」の形は、より聞きやすい「ヘン」の形と交替することが多い。「カカヘン」「ミーヘン」「コーヘン」「シーヘン」となる。「セーヘン」は、西濃地方、あるいは滋賀県以西の言い方との意識がある。b 類動詞の基幹が2音節以上の場合、「タベヘン」のような長形と「タベヘン」のような短形が混在している。岐阜市より西では、一般に短形がおこなわれるが、岐阜市は、おおよそ40代以上で「タベヘン」も根強い。

- ・これ、食べへん? (これ食べない?)
- ・まんだ来とらんのやったら、きょうはこーへんかもしれんなあ。(まだ来ていないのだったら、きょうは来ないかもしれないね。)

過去では、伝統的な「カカナンダ」「カカヘナンダ」のような形は、かなり廃れており、「カカンカッタ」「カカヘンカッタ」のような、共通語の「かかなかった」との混交形と考えられる形式が使われる。条件では「カカンケリヤ」のような新しい形式もあるが「カカナ」のほうが一般的である。なお、この場合「カカヘンケリヤ」は使わない。

共通語の「～ないで」のような否定接続形は、「～ント」「～ヘント」のほか、「～ズニ」が使われる。この場合、「する」は、「シズニ」となるが、これには共通語という意識がある。

- ・勉強しずに寝てまった。(勉強しないで寝てしまった。)

古く行われた「～スト・～シト」の形は、老年層でわずかに聞かれるのみである。

- ・名前書かすと、答案出いてまった。(名前を書かないで、答案を出してしまった。)

〈丁寧形〉

「カキマス」「ミマス」「キマス」「シマス」が用いられる。

〈使役形〉

「カカセル」「ミサセル」「コサセル」「サセル」のような b 類動詞型の活用をする形も用いられるが、「カカス」「ミサス」「コサス」「サス」のような a 類型の使役形がより一般的である。特に、「カカシタ」「カカシテ」のような、過去形とテ形は、b 類型活

用はほぼ使われない。

〈受身形〉

「カカレル」「ミラレル」「コラレル」「サレル」のような形が使われる。この形は、b 類型の活用をする。

〈可能形〉

a 類動詞は、工段形にル(語幹に eru)が付いた「カケル」も用いられるが、より一般的には「レル」が付いた「カケレル」の形が使われる。

- ・その日は用があつて行けれん。(その日は用があつて行けない。)

b・c 類動詞は、基幹に「レル」が付いた「ミレル」「コレル」が使われる。d 類動詞も、「デキル」のほかに「シレル」も聞かれる。

可能には、心情的に不可能であることを表す「ヨーカカン」も使われる。反語以外の肯定可能で用いられることはない。

- ・初対面の人は苦手やで、そんな会にはよー行かん。(初対面の人は苦手だから、そんな会には行けない。)

〈尊敬形〉

当地では多様な尊敬語形式が用いられる。

もっとも伝統的な方言尊敬語形式は、a 類動詞では「イ段形+ンサル」の形で「カキンサル」のように使われる。また、名古屋方言から流入した「カキヤース」も広く使われる。

- ・何、食べんさるかな。(何を食べますか。)

b 類動詞では 型基幹に「ンサル」を付けた「ミンサル」「タベンサル」などの形が使われるほか、「ミヤース」「タベヤース」も多い。

- ・あのじんは、よー食べやーず。(あの人は、よく食べる。)

「来る」は、「コヤース」に加え、「オンサル」が用いられる。全国共通語と同じ「ミエル」は、むしろ「いる」の意味の尊敬語として用いられ、補助動詞として「タベテミエル」のような形が、方言という意識なく用いられる。

- ・おまはん、どっからおんさつたな。(あなたは、どこからいらっしゃいましたか。)
- ・何、食べてみえるな。(何を、食べていらっしゃいますか。)

「する」は「シヤース」と「シンサル」となる。

なお、表には含めなかったが、「カカッセル」「ミヤッセル・ミサッセル」のような「ッセル」型敬語も聞かれる。過去は「カカシタ」「ミヤシタ・ミサシタ」となる。

- ・何、食べやっせるかな。(何を召し上がりますか。)

〈継続形〉

岐阜県内では、継続形は「トル」によって表されるのが基本である。ただし、飛騨地方と東濃地方、および、中濃地方の一部に持続を表す「ヨル」が存在するが、岐阜市以西では、老年層にわずかに残るのみで、一般に、この「ヨル」は軽卑表現として使われる。

- ・さっき、雪降りよったぞ。(さきほど、雪が降っていたよ。)[岐阜市北部の老人]

〈希望形〉

「カキテア」「ヨミテア」「キテア」「シテア」が用いられる。もちろん、「テア」の代わりに「タイ」も使われる。

- ・旅行にでも行きてあーわ。(旅行にでも行きたいなあ。)

〈のだ形〉

共通語の「のだ」に相当する形式としては、「カクンヤ」「ミルンヤ」「クルンヤ」「スルンヤ」のような形が使われる。

- ・こんなゴミ、いったい、どうするんや。(こんなゴミ、一体、どうするのだ。)
- ・なんで、ござらなんだんや。(どうして来なかったのか。)

準体助詞「ン」が入らない「カクヤ」あるいは「カクジャ」は、「そんなに～したかったら～するがいい」との意味をもつ。終助詞「ワ」を伴い「カクヤワ」「カクジャワ」となる。

- ・おまはんがえーと思うんやったら、やるやわ。(あなたがいいと思うのであれば、やったらいい。)

2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

【形容詞】

形容詞は、語幹末母音によって、2種類に分けられる。語幹末母音が「ア」の場合、「赤い」を例に採ると「アカ」のほか「アコ」が交替語幹となる。語

幹末母音が「イ」「ウ」「オ」の場合には、交替語幹はない。

〈断定非過去形・連体非過去形〉

語幹に「イ」を付す。語幹末母音が「ア」の場合、「アケアア」のように融合することが多いが、「安い」「白い」は、「ヤッスイ」あるいは「ヤッシー」「シレー」あるいは「シロエー」[e:]のように、揺れが大きい。「美しい」はそのまま「ウ(ツ)ツクシー」である。

〈断定過去形・連体過去形〉

「アカカッタ」である。

〈推量形〉

断定形に「ヤロ」を付けることで「アケアヤロ」のような形となる。

〈中止形〉

語幹にそのまま「テ」がついて、「アカテ」のようにするのが一般的だが、語幹末母音が「ア」の場合、交替語幹「アコ-(-)テ」となることもある。

- ・こんなにたかては、かえんわ。(こんなに高くては、買えないよ。)

〈なる形〉

「ナル」に続く場合も、中止形同様、「語幹-ナル」が一般的であるが、語幹末母音が「ア」の場合、交替語幹「アコ-(-)ナル」も聞かれる。交替語幹を用いる形は、やや古めかしいという印象もある。

- ・物価が、こうたかなって、生活もできへんわ。(物価がこう高くなるとは、生活ができないよ。)

〈丁寧形〉

「アケアデス」もなくはないが、方言としては、「アケア」に「デス」を付けるのは、あまり自然な印象とは言えない。

〈のだ形〉

断定形に「ンヤ」を後接した「アケアーンヤ」などの形となる。

- ・あの家(うち)、なんでこんなに安いんや。(あの家は、どうしてこんなに安いのだ。)

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形・連体非過去形〉

断定形は「ヤ」を後接する。岐阜市近辺で「ジャ」は、老年層でも聞かれませんが、県内ではまだ聞かれ

る地域もある。

- ・この町は静かや。(この町は静かだ。)
- ・太郎は学生や。(太郎は学生だ。)

断定形が「ナ」となることもあるが、これは「あんき」の場合にほぼ限定される。

- ・お父さんがおらんで、きょうはあんきなに。
(お父さんがいないから、きょうは気が楽だよ。)

〈断定過去形・連体過去形〉

形容名詞述語、名詞述語の断定過去形・連体過去形は同形で、「ヤッタ」の形をとる。

〈推量形〉

形容名詞述語、名詞述語の断定過去形・連体過去形は同形で、「ヤロ」の形をとる。

〈中止形〉

形容名詞・名詞に「デ」を後接した形になる。

〈否定形〉

形容名詞・名詞に「ヤナイ」を後接した形になる。

〈なる形〉

形容名詞・名詞に「ンナル」を後接した形になる。

〈丁寧形〉

形容名詞・名詞に「デス」を後接した形になる。

〈のだ形〉

形容名詞・名詞に「ナンヤ」を後接した形になる。

- ・あのじん、まんだ学生なんやて。(あの人は、まだ学生なのだよ。)

参考文献

山田敏弘(2004)『みんなで使おっけ! 岐阜のことば』まつお出版

山田敏弘(2014)『岐阜県方言辞典V～文法』科研費報告書

(山田敏弘)